

本を選ぶ

NO.450 2022年(令和4年)11月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>植物たちのおしゃべり 再

●大学教員ノート 第8回



ろん・ぼわん

植物たちのおしゃべり 再

NHK交響楽団に先頃着任した主席指揮者ファビオ・ルイーダ氏の紹介番組を偶然見た。当然ながら音楽的な素養・見識、一流の楽団の指揮者としてのキャリアについては申し分のない人物らしいが、むしろこの音楽家の余暇の過ごし方には興味をそそられる。なんと香水の調合こそが何よりの時間だという。幼少の頃より香水やアロマに惹かれて育ち、独学で調香の知識と技術を会得したらしい。ルネサンス期のイタリアで発展したとされる香水文化をバックグラウンドとして持つ欧州人の奥深さが感じられる。もはやアマチュアの調香師レベルのようだ。人並み外れた絶対音感のみならず、数多の薫香を嗅ぎ分ける嗅覚も併せ持つ秀逸な感覚人なのだろう。

番組では、調香のための専用スペースや道具一式と調香の素材となるアロマ・エッセンスなどがずらり並ぶさまが映し出されている。彼が香水を調合する実際を見ていると、オーク・モスとパチュリを基剤として使おうとしていた。

オーク・モスとは、文字通り樫の木の根元や幹に植生する苔（菌類）と藻類の複合体から抽出した精油（エッセンス）を意味する。一言で言うなら、大地の香りを想起するようなどっしりとしたアロマ、と専門家は表現するが、要するにかび臭い感

じがするようだ。一方、パチュリはシソ科の植物で、和名が藿香^{かつこう}というお香の材料にもなっている。やはり単独では香しい^{かぐわ}と言うより地味な精油とされる。しかし、このいずれの香り成分もさらに合わせる精油次第で驚くほどヴィヴッドで奥行きのある香水が仕上がると専門家は言う。文字通り調合の妙味が結果となって芳香を放つ。

香水と違って安価に買えるオー・ド・トワレやオー・ド・パルファンと称する希釈された芳香剤には、近年どうしても高価になる天然成分に替わる化学合成された成分が添加されていると聞く。それだけ植物などから抽出された天然成分は稀少で化学的再現が困難であるらしい。

今年の初めだったか、富山大学の研究グループが^{じんこう}沈香の香り成分を生み出すために重要な酵素の解明に成功した、という発表があった。（<https://www.u-toyama.ac.jp/wp/wp-content/uploads/20220118.pdf>）今回発見した酵素の遺伝子発現と香り成分の蓄積を詳細にモニタリングしながらストレス条件を明らかにしていくことで、人工の沈香栽培に繋がる可能性があるという。さて、うまくいくのか。近い将来これが実現すれば、人間は植物に近づけるぞ。

「植物たちは、根から吸った水と空気中の二酸化炭素を材料にして、太陽の光を利用して、葉っぱでデンプンなどをつくっています。（中略）」たった1枚の小さな葉っぱの毎日の営みを「私たち人間は真似することができないのです。“植物は、すごい”と納得せざるをえないでしょう。」（『植物はすごい』（田中 修著／中公新書／2012年）（埜村 太郎）

大学教員ノート 第8回

—大文字と小文字—

石川 敬史

熱意を持って話せば大丈夫。何を言っているか分からなくても、とにかく熱い思いで話すことですね。

大学教員になると、講演会や研修会にお声がけいただく機会が増える。埼玉県のある小さな大学に勤務する私のような者に——本当にありがたい限りである。いささか緊張している私に対して、学部学生時代の恩師から、このようなコトバをいただいたことをはっきりと覚えている。

エスカレータ近くの本棚に座って、準備していたのを見ましたよ。

ここは大阪府豊中市。A研究会のBさんより半年前にお声がけいただいた研修会——大学教員になってまだ数か月——準備のために積み重ねた時間、研修会で流した大量の汗は今でも忘れられない。「現場」の文脈で、どのようなコトバで表現すればよいのか、どのタイミングで何を発言すればよいのか——とにかく試行錯誤の連続だった。1人で格闘続けたご褒美なのであろうか、終了後のアルコールの記憶も今でも鮮明である。そして、ここで関西の図書館に勤務する熱い熱い多くの皆様に出会った。まさに「緊張」と「解放」という文字が相応しいかもしれない。もう10年以上の時間が経ったであろうか、今でもつながりがある多くの皆様である。出会いへの感謝を大事にしていると、東海地区を基盤とするC研究会からお声がけいただくことになる。

東海地区の大学図書館員は団結しているんですよ。

ここは愛知県名古屋市の愛知大学。東海道新幹線の車窓からも確認できる新キャンパス内の図書館を研修会前に見学。見学の道中、ふと私に語り

かけたDさんからのコトバが気になった。そう、東海地区内の大学図書館員間の強固なつながりである。熱い思いで私が壇上で語ると、熱いグループワークへ、熱い発表へ、熱い懇親会へと広がる——「団結」というコトバに、講演会・研修会の主役は講師ではなく、勤務する大学をこえた参加者・図書館員であると気がつく瞬間である。図書館への「情熱」と「愛」という2文字を東海地区の方々より教えていただいた。ここでの出会いが契機となり、東海地区の複数の研修会講師に、さらには複数の懇親会に、お声がけいただいた。

「コーチング」についての研修会講師は可能ですか？

ここは大阪大学豊中キャンパス。懇親会終了後、とにかく広大な敷地内を歩いていると、ふと参加者よりお声がけいただいた。「コーチング」というコトバから、人を育む組織づくりに関心のある図書館員とすぐに推察できた。このEという近畿地区の大学図書館関係の研修会は、大きな組織で、国立大学の図書館員が多かった記憶がある。研修会は部長の挨拶にはじまり、課長も係長も長時間にわたるグループワークに汗を流した。所属をこえて、役職をこえて、語りあう参加者の背中をみていると、偉そうに高いところから語る私のコトバは無力であり、現場を背負う一人一人が語るコトバの中に重みがあることを痛感する。「自負」という図書館で仕事をする姿勢が、その背中に描かれていたことを覚えている。

実は私、北海道から来ているのです。

実は私、栃木から来ているのです。

実は私、埼玉から来ているのです。

ここは東京・上野のF研究センター。全国各地の公共図書館員が対象である。本当に本当に緊張

した。研修会終了後は名刺交換のための長い長い行列が……ありがたい限りである。以後、F 研究センターからは数年にわたってお声がけいただき、全国の公共図書館の皆様より「現場」のコトバに触れる貴重な機会をいただいた。席替え、模造紙、マジック、音楽、投票、シール、席順——実は毎年緊張の登壇であったが、F 研究センターへあれやこれやと私の希望を伝えてしまった。実は講座を運営するF 研究センターの専門員の皆様も全国各地の都道府県から集う精鋭の社会教育主事であった。登壇前後、等身大のコトバで語りあうF 研究センターの皆様との談笑は贅沢な時間であった。

＊ ＊ ＊

先生、先生、先生と言われて外部で研修会講師ばかりやっていると、大学の教員は本当にダメになりますね。自分が偉いと勘違いしてしまうんです。ダメですね。

学部学生時代の恩師から、一方で厳しいコトバもいただいた。何回も講演会や研修会にお声がけいただくと、知らずのうちに自分に甘えて勘違いしている「先生」がここにいる。このコトバを思い出したり、忘れたり、思い出したり——このコトバはしっかりと胸に刻まなければならない。

建物だけの図書館となっています……。

ここは青森県弘前市。真冬の青森であり、道路は凍結していた。土地勘が無いので、この地区の公共図書館の資料費・経年変化を事前に調べて研修会に挑んだ。が、現代的な空間を演出する、とある新設館の資料費——実はこの数年前に足を運んだことがあったので——あまりの少額であったこと、その「衝撃」は今でも忘れられない。研修会終了後、いつも通り名刺交換をさせていただく。この場で、新設館に勤務するGさんよりコトバを投げかけられた。「衝撃」である。研修会のどこかのタイミングで、私が無意識にコトバを発してしまったのであろうか……。後日、Gさんへは資料費増額に対する方策などを文字に刻んで発送させ

ていただいた……。

ところで、どうしてこの内容を取り上げたのでしょうか？

ここは埼玉県さいたま市。埼玉県内の図書館員を対象とした講演会である。現代社会に求められる図書館の意義や課題をテーマに汗を流しながら語った後、質疑応答の時間に寄せられたHさんからのコトバである。参加者は60名ほどであろか、講演会の会場は静かであった。推測するに、親しいからこそ率直にコトバを私へ投げたHさん——私は確かにコトバをキャッチしたが、返答したボールはスマートな直球ではなく、完全なる暴投であった。「私の関心のある内容を取り上げました」と……。登壇者中心の視点であり、お恥ずかしい限りである。図書館の動向を鳥の眼で見つめ続けていない自分に反省である。

戦略って、理事長の一声で変わってしましますよね。

ここは大阪市阿倍野区。有名な超高層ビルの中にある大学のサテライトキャンパス。関西の空と地を一望できる別世界で開催された研修会である。いつも通りグループワークに移り、私が「机間巡回」をしていると、ふとIさんが私に語りかけた。図書館の戦略をどのように構築していくのか、そんな研修会であった。Iさんのコトバはまさにリアリティーのあるコトバであり、「ちゃぶ台返し」でもある。その場で的確に反応できず、「そうですね……」と発した恥ずかしい自分が、別世界の超高層ビルにいた。地上に移動した懇親会にて、小さな地方の大学で格闘するIさんの経験談が熱いコトバで語られ、参加者とともに地に足がつく議論が交わされた。今、Iさんは何をしているであろうか……。

アウトリーチって、そもそも図書館でやんなくちゃいけないんですかね？

ここは埼玉県新座市。十文字学園女子大学の石川研究室である。コロナ禍であるため、オンラインによるF研究センターの講座である。オンラインであっても少人数でのグループワークは展開される。確か5人1組だったであろうか。講師は画面を操作しながら各班を随時移動して議論をのぞくことができる。移動の度に緊張する瞬間である。すると、とある班にてJ図書館のKさんからのコトバが画面から聞こえてきた。あくまで画面上ではあるが、Kさんはモヤモヤ感がある様子であった。実は、F研究センターの講座では、まず各地の先導的な実践例が取り上げられた——私の講義はこの後の最後に位置されていた——次の時間は私が発するコトバが試されるのである……。画面を通して熱いコトバで語らなければならない。

＊ ＊ ＊

いささか一般論となってしまうが、「言葉」と「文字」とは異なる。「言葉」とは何かしらの意味と声が結びついたものであるのに対し、「文字」とは、その社会の慣習を前提として、「言葉」を何かしらの物に記録するため用いられる記号といえるだろう。とすると、講演会や研修会で私が語るのは、あくまでコトバであり、参加者が私に語りかけるのもコトバである。何かしらの意味と声が結びついたコトバ——いわゆる身体性をも伴うコトバが消費されないように意識して語るには何に気をつければよいだろうか（もちろん大学の授業でも同じであるが）。

＊ ＊ ＊

講演会や研修会で語るコトバは難しい（もちろん、参加者から語りかけられる予想外のコトバも難しい……）。いただいた貴重な時間、多くの内容を整理し、筋道立てて展開し、リアリティーのある事例を述べながらも、間をつくって一旦呼吸を置き、会場へ問いを投げかけ、耳を傾けている一人一人が自ら思考し納得できる時間へどのように導くのか——会場内で登壇する自分を参加者の視点でイメージしながら、魅力あるコトバを発するため試行錯誤しながら準備を進め、迷っていると、ふと思うことがある。

文字がすぐれて人間の意識の「立ち止り」の産物であり、意志的、個別的な表明の結晶であるとすれば、無文字性と呼ぶべき部分は、その基底部をなす、無意識的、集合的ないわば文化の下部構造に対応するといえる（p. 229）。

ふと思うこと、それはコトバとは何か、そして文字とは何か、ということである。かつて『無文字社会の歴史：西アフリカ・モシ族の事例を中心に』（岩波書店／1976）を著した人類学者の川田順造は、文字と無文字をこのように指摘した。川田には口頭伝承についての数々の著作がある。川田は同書でこれからの社会と文字について、次のように述べている。

人類史の流れの中で文字が出現し、その使用が次第にひろまったあとで、他の伝達技術の発達によって、それまで文字が果たしてきた機能の多くのものが、他のものにとって代えられてきており、その趨勢はこれからも速度を増してすすんでゆくだろう（p. 224）。

川田は統計、記録、契約、道路標識などをあげている。1970年代後半の著書であるが、単なる昔話として扱うことはできない。テレビ、ラジオ、電話、メール、SNS、YouTube、音声検索——現代社会に麻痺して生活している私たちにとって、川田が述べる「その趨勢」がさらに加速していることに自覚的にならなければならない。その一方で、「無文字性と呼ぶべき部分」——生活慣行、儀礼、様式、習俗など——すなわち文化の下部構造はどのように変化し続けているのであろうか。変わらないものとは一体何であろうか。

私がここで言う“大文字”の言葉とは、日本列島の津々浦々で通用する便宜的な用語という程度の意味である。また“小文字”の言葉とは、世界を説くことはないかわりに誰の胸にも届いて感動を呼び起こす肉声といった程

度の意味である (p. 31)。

2022年9月に鬼籍に入った佐野眞一。丹念な取材による数々のノンフィクション作品のほかに、ノンフィクションの入門書をも何冊か上梓している。彼が刻んだ「大文字」と「小文字」も忘れることはできない(『目と耳と足を鍛える技術：初心者からプロまで役立つノンフィクション入門』筑摩書房／2008)。佐野によると、大文字とは何かを言っているようで何も言っていない——「構造改革」のように——言っている本人も実はわかっていない、分かったような気にさせる「説く」言葉であるという。対して小文字は、活字だけで世界がくっきりと浮かび上がり誰の胸にも届いて感動を呼び起こす肉声であり、「語る」言葉であるという。

公立高校に無事に入学した息子がもってきた卒業文集を開いたときだった。その作文は、息子のものも含め、どれも同じ文体、同じ発想の鋳型で貫かれ、まるで、学校という加工工場からベルトコンベアーで運ばれた文章のプロイラーをみるようだった (p. 429)。

学部学生時代に読んだ『遠い「山びこ」：無着成恭と教え子たちの四十年』(佐野眞一／文芸春秋／1996)の「あとがき」である。佐野はこうに

記し、「文章のもつ力は、なぜこれほどまでにこなわれてきたのか」と疑問を投げかけている。佐野はノンフィクションを『「足で書く」文芸』と表現している。インターネットによって地球の裏側も瞬時に情報を入手できる時代になった。しかし、ノンフィクションは情報に早くアクセスするかを争うゲームではなく、情報にたどり着くまでの道筋が重要であると指摘する。

＊ ＊ ＊

記録化された知識や情報を選択し、収集し、組織化して、市民に提供する——歴史を積み重ねている図書館という現場では、常に「文字」に向き合っていることはもちろんである。同時に、社会における「文字」の趨勢と無文字性に自覚的でなければならず、これをいかに「小文字」で語ることができるのか。このことが講演会・研修会の壇上で試されているような気がしてならない。

＊ ＊ ＊

毎号、「意志的、個別的な表明の結晶」として刻まれ続けた『本を選ぶ』。450号をむかえた。私のような者が450号の執筆者となり、恐れ多いことである。小文字で語り続けた『本を選ぶ』の轍が読者の思考を導いていくことを確信する。

(いしかわ たかし：十文字学園女子大学)

☆十文字学園女子大学石川敬史研究室 →

<https://www.jumonji-u.ac.jp/sscs/takashii/>

DMかたるく

知らなかった! 調べる学習百科

赤ちゃんが生まれるまでの時系列で解説!

おなかのなかの赤ちゃん図鑑

増崎英明・監修
WILLこども知育研究所・編著

赤ちゃんが生まれてくるまでの秘密を徹底解説!

生まれる前は誰もがたったひとつの受精卵です。受精卵ができるまで、そしてそこからどうやって人の形になっていくのか、本書ではその不思議を時系列で解説。写真とイラストをたっぷり用い、おなかのなかの様子がイメージしやすく、調べる学習にぴったり! 赤ちゃんの成長を追うことで命の尊さも伝わります。

●本体3,600円+税 ●全1巻
●A4変型判／64頁
●ISBN978-4-265-08658-0

小学校・中学校～中学生

この1冊が未来をつくる

岩崎書店

〒112-0005 東京都文京区水道 1-9-2-2階
TEL 03-3812-9131 FAX 03-3816-6033

ウォンバットのうんちはなぜ、四角いのか?

とあるウォンバット研究者の数奇な人生

1760円

本邦初!

「謎のモフモフ動物」の生態が明らかに!

オーストラリアに生息する可愛くて不思議な生き物の魅力のすべてを、日本一詳しい研究者が徹底紹介!

高野光太郎

晶文社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-11
Tel 03-3518-4940 <https://www.shobunsha.co.jp/>

D. プリチャード／笠木雅史 訳

知識とは何だろうか

認識論入門 基礎から最新の動向までを学べる最強の入門書、遂に登場！ 4400円



E. コッチャ／松葉 類・宇佐美達朗 訳

メタモルフォーゼの哲学

新しいエコロジーを導く、種・土地・世代を超えた変態の形而上学。 3300円



勁草書房

TEL 03-3814-6861 *価格税込
FAX 03-3814-6854〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 <https://www.keisoshobo.co.jp>

日本視覚学会 編集

B5版 368頁 オールカラー
定価 13,200円 (本体 12,000円)
ISBN978-4-254-10294-9 C3540

■ 視覚研究の基本と応用を1冊で！
■ 約80のキーワードについて解説。
■ 見開き完結でわかりやすい記述。
■ 豊富なカラー図版で理解しやすく！

朝倉書店

東京都新宿区新小川町6-29
T162-8707 TEL03-3260-7631

観光経済学

理論とデータで学ぶ

山内弘隆・山本史明・
山崎茂雄・川口明子 編

「観光」という行動をデータから経済学的に捉える1冊。観光のあり方が問われる今こそ必要になる理論を、豊富な事例と第一線の専門家の解説でわかりやすく体系化。観光のニュースタンドードを提供します。



A5判 定価 3,190円



有斐閣

東京都千代田区神田神保町2-17
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

価格は税込

性をはぐくむ
親子の対話

この子がおとなになるまでに

野坂祐子・浅野恭子 [著]

●12月上旬刊／予価1760円(税込)
ISBN 978-4-535-56421-3

自分のこころとからだ性を、こちよく感じられるようになるために。子どもとおとなが一緒に性について学び、対話するヒント。

発達障害のサイエンス

鷺見 聡 [編]

発達障害に関する最新の科学的知見をわかりやすく解説！臨床現場での支援に活かすための入門テキスト。

支援者が知っておきたい
医学・生物学的基礎知識●12月中旬刊／予価2530円(税込)
ISBN 978-4-535-98527-8

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
☎ 03-3987-8621 <https://www.nippon.co.jp>児童心理学・
発達科学ハンドブック発達心理学の権威ある
ハンドブックが第7版にして
待望の本邦初訳！

リチャード・M・ラーナー 編集主幹

二宮克美、子安増生 監訳

河合優年、服部 環、郷氏 徹、山 祐嗣、小塩真司、
仲 真紀子、根ヶ山光一、氏家達夫 編訳第1巻 理論と方法 第2巻 認知過程 第3巻 社会情動の過程
第4巻 生態学的情況と過程 別冊 各巻目次／人名・事項索引■B5判／上製・函入／総6068頁
定価 220,000円【分売不可】
ISBN978-4-571-23510-8

最新の知見を総勢117人の発達心理学や関連領域の専門家が翻訳(全88章)。発達心理学をはじめとする心理学研究者のみならず、実務家・大学院生・学部生必読必備、待望の邦訳版！

全4巻
(8冊)
+別冊福村出版 | 〒113-0034 東京都文京区湯島2-14-11
TEL 03-5812-9702 FAX 03-5812-9705 <https://www.fukumura.co.jp>人類3000年の歴史において、
世界各地で勃発した144の戦場を詳述！

地図とタイムラインでわかる

戦争の世界史
大図鑑BATTLES
MAP BY MAPピーター・スノウ [序文] フィリップ・セイビン [監修]
辻元よしふみ [監訳] 吉嶺英美 / 府川由美恵 / 花田知恵 [訳]

◎体裁：B4変形／上製 288頁／オールカラー

◎定価：7,700円(税込)

ISBN 978-4-309-22851-8

河出書房新社 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2
www.kawade.co.jp/